

# さよなら ジュピター

下

小松左京



# さよなら<sup>20</sup> ジュピター

Bye-bye Jupiter

下

小松左京



サンケイ出版

さよならジュピター(下)

昭和57年4月10日 1刷

昭和57年4月26日 11刷

定価 九八〇円

著者 小松左京

発行者 清水大三郎

発行所 サンケイ出版

株式会社

東京都千代田区大手町一の七の二(千100)

TEL(東京)二三一七一一(代)

大阪市北区梅田二の四の九(千530)

TEL(大阪)三四三一一二二(代)

印刷 大日本印刷

製本 田中製本

※万一、乱丁落丁の場合はお取替えいたします

目次(下)

第六章 危機の正体(承前)

3 破壊工作

4 オペレーション・センターにて

5 ブラックホール

6 オレンジ警報<sup>アラート</sup>

7 マリア

8 衝突進路<sup>クラッシュコース</sup>

第七章

黒い渦

1 インサイド・パニック

## 第八章

- 2 太陽の傍かたわらで
- 3 非常招集
- 4 キャッチ・ザ・「X」
- 5 “ノア”の計算
- 6 一万八千時間
- 7 100対1・3
- カウント・ダウン
- 1 地球の秋
- 2 影の闘い
- 3 プロジェクトX
- 4 大統領狙撃  
ブラック・ライトニング
- 5 “黒い稲妻”

## 第九章

- 6 “X”を撃つ
- 7 “B・B・J”
- 8 特別非常大権
- 9 フライイング
- 10 GO!
- バイバイ・ジュピター
- 1 ダイレクト・コンタクト 直接接触
- 2 エクソダス・フリート 脱出船団
- 3 恒星への旅
- 4 ナルドレン・オブ・スペースゴッド “宇宙神の子”
- 5 フロリダの熱い日
- 6 ジュピター海岸ビーチの午後

## 終章

### 太陽の喪章

---

- 7 “巨大な赤ん坊”
- 8 “バイバイ・ジュピター……”
- 1 危険な賭け
- 2 ランセン
- 3 B・Tマイナス一〇〇H…フラッシュ・ボード
- 4 B・Tマイナス六〇H…フェーズ・レッド
- 5 B・Tマイナス四〇H…ステップ2
- 6 ファイナル・ステップ
- 7 B・Tマイナス〇五H…全員退去
- 8 “マーハヤーナ60”
- 9 コントロール衛星

あとがき

- 10 「ジュピター・メッセージ」  
11 ターン一八〇  
12 虚無への墓碑銘<sup>エピタフ</sup>

イラストレーション || 加藤直之  
ブックデザイン || 安彦勝博



## ●主な登場人物●

本田英二 || ミネルヴァ基地の最高責任者 J S 計画の調査主任  
カルロス・アルバレス || ミネルヴァ基地の研究主任  
ムハンマド・マンズール || 彗星研究の権威 スペース・アロー計画の推進者  
レイ・バーナード博士 || 宇宙考古学者 英二と木星圏を飛行  
モシ・ンザロ || 黒人の宇宙考古学者 バーナード博士の孫弟子  
ミリセント・ウイレム女史 || 宇宙言語学者  
エドワード・T・ウェップ || 太陽系開発機構の総裁 バーナード博士の旧友  
ハワード・ランセン || 同機構の企画部長 英二の上司  
ナリーカー || 世界天文学連合会長  
オットー・ヴィンケル博士 || 同連合副会長 宇宙飛翔体工学の権威  
オットー・ヴィンケル・Jr. || 弱冠21歳の天才科学者 ヴィンケル博士の息子  
ヤン・タオルン || シューベルト通信基地の副主任  
アレクサンドロス・パドロポス || 宇宙船テレメーター解析員  
ジェイコブ・ミン博士 || 世界連邦大統領  
シュクロフスキー || 同連邦副大統領  
ダグラス・オフアット || 同連邦公安委員長  
アルデン・シャドリク || 同連邦の次期大統領を狙う上院議員  
マリア・ベースハート || 英二の恋人 J S 計画反対を叫ぶジュピター教団幹部  
ピーター・トルートン || 同教団の教祖  
アニタ・ジューン・ポープ || 同教団の超過激派幹部

さよならジュピター(下)



危機の正体  
(承前)

## 3 破壊工作

L4宇宙コロニーの情報処理衛星インフォーム・サットに定期フェリーでついでから、コンピューター・ステーションの使用予約時まで、約七時間ほどのブランクがあった。——その間、バーナード博士は、休息をとるため宿舎の個室で眠り、ミリーは個室の中で携帯用コンピューターを、この衛星のコンピューター回線につないで、仕事の下準備をつづけた。

一時間ほど作業をつづけて、さすがに疲れを感じて、ルームサービスにコーヒーを注文すると、椅子に腰かけたまま、しばらくうとうとした。

そのうち、突然ドアはげしくノックされ、その音に

おどろいてミリーは危うく椅子からころげおちそうになった。

「わかったわよー もっと静かにたいたらどう？」ミリーは、大声で叫びながら、立ち上ってドアの方へ行つた。「なによ、一体……。火事でも起つたの？」

腹だちまぎれに、ドアをいっばいにひきあけると、そこに宿舎の従業員とも思えぬ男がたっていた。——浅黒い顔にサングラスをかけ、長髪を肩までたらし、色のあせた黒のTシャツに洗いざらしのジーンズ、素足にサンダルばきといういでたちの、その小柄な東洋人は、コーヒীরトレイを肩の所にささげ、にやりと白い歯をむき出して笑っていった。

「コーヒーをおもちしました。レイディ・ウイレム……」

「ヤン！」とミリーは叫んで、大きく腕をひろげた。

「ヤンじゃないのー——よくここがわかつたわね！」

「おっと……、ミリー、コーヒーをおかしてくれ。——本職のボーイじゃないから、へたするとひっくりかえしちゃまう……」

月面シューベルト通信基地の副主任ヤン・タオルンは、抱きつこうとするミリーを、片手で制して、ちょっとよろけた。——彼の肩の上でコーヒー・セットが、が

ちゃがちゃとやかましい音をたてた。

「あんたがここへくるという情報は、シュールベルト基地の連中が知らせてくれた……」テーブルの上に、トレイをおきながらヤンは陽気な声でいった。「おれは、四、五日前からここへつめてるんでね。——フェリーの乗客名簿をマークさせといたのさ。どうせ、資料保存所に用があるんだろが、でも、いい時に来たぜ。あと二、三日で、資料衛星は、三年に一度の「情報棚おろし」にかかる。それがすんじまうと、古い方の記録は、特に一次資料類が、新しく準備中の資料保管衛星へうつされちまつて、しばらくの間、検索システムがごたついたりして、直接アクセスしにくくなるからな……」

シャベリながら、ヤンは二つのコーヒーカップに、香り高いコーヒーをそそいだ。——そそぎおわって、ミリーの方をふりかえると、ミリーは、なぜか涙をいっばいにかべて、ヤンの後姿を見つめていた。

「さて……コーヒーはいかが？」とヤンはおどけた身ぶりでテーブルをさした。「やつがれもお相伴させていただければ光栄でございますが……」

突然ミリーは、体をぶつけるようにヤンに抱きつき、顔を彼の肩におしつけてすすり泣きはじめた。

「つかれてんだな、ミリー……」ヤンはやさしくミリー

の背をさすりながらつぶやいた。「そうだと思っただよ。木星での仕事は、プロレスラーでも顔を出しそうなきつものだって、ミネルヴァ基地の知り合いが教えてくれたし……あの遭難した「スペース・アロー」に乗りこんでいた、R・イノウエって学者は、あんたの恋人だったんだってな……」

「ごめんさい、ヤン……」ミリーはぬれた顔を、ヤンの色あせたTシャツからはなし、ハンカチを出して眼をぬぐった。「あなたには、通信基地で仕事をしていた時、ずっとやさしくしてもらっていたもんだから、つい……」  
「ほんととは、おれ、あんたの事、かなり好きだったからさ……」ヤンはミリーの手をとって、椅子にかけさせた。「でも、あんたはすげえ大学生で、誇高いレディで、それに、ほかにこれもすごくりっぱな恋人がいるって事がうすうすわかってたから……女教師に片想いした高校生みたいな、がきっぽいナイト役を、好きでひきうけてたんだ！」

「ありがと、ヤン……」ミリーは、赤くなった鼻の下をハンカチでおさえて、無理にほほえんだ。「でも、私なんか、でもどりで、おばあちゃんよ。——井上が死んでから、またいっぺんに年とつたみたいに感じるの。……八十歳の尼さんになったみたい……」

「コーヒー、さめるぜ……」受け皿ごとカップをすすめながら、ヤンはいたましそうに眼をそらした。「砂糖は？」

「この所、コーヒーも紅茶もずっとブラック」と、カップをうけとりながらミリーはつぶやいた。「喪服を飲んでみたい……」

「あなたは少し、休む事をおぼえた方がいい」ヤンは自分のカップにミルクをたっぷり入れながらいった。「いつもいつも、はりつめすぎで、今にもぶつりと切れそうな感じだ……」

「私たち、いったい何やってるのかしらね、ヤン……」ミリーはコーヒーカップをさすりながら、うつろな眼つきでつぶやいた。「あなただって、あんまりのんびりしてる所なんかみた事ないわ。——私、このごろ自分が、何のために、どこへむかってつぶばしっているのか、時々ふっとわからなくなるわ……」

「人間が、『宇宙』なんてものに、手をつけたからいけないんじゃないかな……」ヤンは鎮静スティックを口にくわえながらいった。「やみくもにのり出したものの、どうも、宇宙ってのは、今のままの人間の手にあまるような気がするんだ……」

「じゃ、あなたはいつか宇宙から隠退するつもり？」

「いいや——」ヤンはゆっくり首をふった。「そんな気は毛頭ない。——おれは宇宙が好きだし……つぶばしりながら死ぬのも悪くないと思ってる……」

ミリーは、くすつ、と笑った。

その笑いに、ほっとしたように、ヤンは立ち上った。

「さて、ミリーねえさん……。なにか手つだえる事はあるかい？——どうせ、例の『宇宙メッセージ』の解読のための資料検索の準備をしていたんだらう？ そのくらの事ならやってあげるよ……」

「ありがたい。——少しやつてもらおうかしら……」ミリーは、回線につないだままになっている個人用の端末をふりかえった。「こちらのメモリーにはいつている解析プログラムの枠組と対応する資料が、衛星にどのくらいあるか、つきあわせている所なの。作業時間が、大体どのくらいかかりそうか、見当をつけるだけだから、まだごくあらっばい大分類コードでしらべているだけ……。チェック・プログラムはもう組んであるから、あとはステップごとの指示にしたがえばいいんだけど……」

「わかった。そのくらの事ならやっというてあげるよ。——その間すこし寝たらどうだい？ 次は何時に起せばいいの？」

そうね……と、ミリーはなまあくびをしながら、時計

を見てつぶやいた。——三、四時間は寝られそうだが、  
本場に少し、休ませてもらうわ……。

それを声に出していったのか、半分夢の中でいったのか、はつきりわからないほど、急にはげしい睡魔がおそってきた。——椅子から立ち上り、ベッドへむけてよろよろと歩いたのはおぼえていたが、ベッドの上になおれこんだ記憶はなかった。

次に眼がさめたのは、誰かが遠慮がちにドアをノックしている音に気づいたからだ。——ミリーは、服を着たままま、ベッドの上につぶせに寝ていた。毛布が背中にかかっていたが、室内にヤンの姿はなかった。

「ミリー……私だ……」とドアの外でパーナード博士の声がした。「眠っているのかい?——そろそろオペレーション・センターへ行く時間だが……」

ミリーは、はっとして起き上った。——コーヒーセツトもテーブルの上になく、デスクの上の携帯用端末は、コードをはずされ、きちんと蓋がしてあり、その上にヤンの残して行った走り書きのメモがおかれていた。

——コードの照応は全部完了、ディスク2と3にセーブしておいた。君の予想より、こまかい断片的資料がかなり多いみたいだ。小生のチームは君たちより少し早

く、センターの使用許可を貰っているので、先に行っている。むこうであるかも知れない。使用ブースはB棟の206D。

ヤン・T

PS、今の仕事が一段落したら、ぜひとも休暇をとって、少しゆっくり休養する事をおすすめす。小生、アジア大陸某所に自信をもって推薦できる、それはそれはすてきなシャングリラのような保養地を知っており、その有力者にも強いコネあり。ぜひ御相談あれ。

Y・T

PPSS、寝言で言っていた、「エイジ」とは、そもいかなる人物なりや?

情報処理衛星は、L4宇宙コロニーの中では、やや小ぶりな人工天体だったが、それでも常住人口六千五百人、長軸方向に一・五キロもあり、ミリーたちの宿舎のある居住区から、反対の端にある巨大コンピュータのオペレーション・センターまでは、小型のカートを使う必要があった。

むこうへつけば、予定時間よりまだ三、四十分早い事はわかっていたが、少し早めに行って手つづきをすませ、センターの一部を見学してみようというので、ミリ

ーとバーナード博士は、カートを借りてセンターへむか  
った。

走り出して間もなく、行程の三分の二ほど来た時、突  
然行く手でぶい爆発音がひびいた。つづいて、鋭い警  
報音が街路に鳴りひびき、保安関係の車が何台も、爆発  
音のした方向へすつとんで行った。

「なんでしよう？」

交通管制システムによって、自動的に電源を切られ、  
道路脇にとめられてしまったカートの中で、ミリーは不  
安そうに前方に眼をこらした。

「何か事故でもあったのかな？」バーナード博士もシー  
トから立ち上った。「センターの方で、何だか煙が出て  
いるように見えるが！」

街路には、多勢の人たちが立ちどまって、通りのつき  
当りをながめ、ささやきあっていた。——ミリーはカー  
トのラジオをいれた。報道管制のビートが、どの周波数  
にも流れており、アナウンスは数分後の臨時ニュースを  
お待ちください、とくりかえすばかりだった。しかし、  
周波数をきりかえて行くと、保安関係の無線交信らしい  
ものがかすかにはいり、「オペレーション・センター」  
と「爆弾」という言葉がキャッチできた。

「冗談じゃないわー！」

ラジオのスイッチを切って、ミリーは小さく叫び、シ  
ートから立ち上った。

「爆弾だと？」バーナード博士もカートから降りなが  
ら、呆れかえったようにつぶやいた。「オペレーショ  
ン・センターにそんなものをしかけるなんて……いった  
いどんな連中が……！」

「宇宙開発に反対する狂信団体が、このごろまた、あち  
こちでさわぎを起しかけてるみたいですよ」

ミリーは、カートをそのままにして、足早に歩き出  
しながらつぶやいた。

「若い連中かね？」バーナード博士もミリーの後を追っ  
て歩きながら言った。「そういえば——もう大分前の事  
だが、木星のミネルヴァ基地で、地球からの視察団にま  
ぎれこんでいた、若い過激派みたいな連中が、暴れた  
事があったが……。その中の一人の娘は、基地主任の本  
田英二の知り合いだった。いや……恋人というべきか  
……！」

「若い人たちは、煽られて騒ぐだけでしょうが、その背  
後に、どうやら厄介な政治勢力があるみたいですよわ  
……！」ミリーは大通りから横道へ曲りながら、顔をしか  
めていった。「火星でも、そんな若いのが、四、五人地球  
から送りこまれて……何もしないうちに保護されました



けど、開発機構の保安部の連中は、ぼやいていましたわ。どうも、宇宙もだんだんきなくさくなってくるって……」

大通りをまっすぐ進まず、横道にそれたミリーの考えは、バーナード博士にもすぐわかった。——両側の建物の内部を、大通りと平行に、ベルトロードが走っていて、これはミリーの勤が当って、交通管制をうけずに動いていた。途中何度ものりつがねばならなかったが、それでもその上を歩いて行けばふつうに歩くよりははずっとはやく、オペレーション・センターのすぐ近くにまで行ける。

センターのすぐ横のビルで、ベルトロードをおりると、センターの前には数百人の群衆が集ってさわいでいた。——保安関係の車が数台、それに救急車がとまり、センターの入口の手前にはロープがはられ、制服の保安要員が群衆を制している。センターの入口のガラスのドアが砕け散り、中からまだ、うすい煙が流れ出していた。「どうしたんですか？」

ミリーは、人々の頭ごしのび上って前を見ながら、傍の男にきいた。

「センターの入口をはいった所で、爆弾が破裂したんですよ……」と、中年の男はいった。「大した大きさのもの

のじゃない。まあ、いやがらせ程度のものらしいですがね。それでも、受付けのあたりにいた二、三人が怪我をして、さっき救急車に運びこまれていました……」

「センターの機能は大丈夫ですか？」

「さあ……、そこまでは、私にわかりませんが……」

「犯人らしい若いのが、四、五人、つかまったようだぞ……」と、別の誰かの声がした。「保安車のラジオがいつてた。——別の所で、投石さわぎを起したらしい……」

「ちよつと失礼……」

ミリーとバーナード博士の間をわつてはいるように、黒い髪、黒い口髭の、色の浅黒い男が、汗みずくになつて、人ごみをかきわけ、前へ出ようとした。——L5のオニール中継点で、フェリーに一番最後にかけてこんで来た三人の乗客の一人だ、という事を、ミリーはすぐ思い出した。彼のあとについて行くようにしてミリーとバーナード博士も、何とはなしに前の方へ出た。

ヘルメットのバイザーを深くおろした保安要員が、手をあげてロープの所まで出たその男を押しもどすようなしぐさをした。

「世界天文学連合のムハンマド・マンストールだ……」と

その男は汗をしたたらせながら、紙片をさし出した。

「重要な要件で、このセンターの緊急使用の許可をとつ